パネルディスカッション

【令和6年度学生生活にかかる喫緊の課題に関するセミナー】

大学等における防災と学生支援

立命館大学における障害学生との災害時対応の取組みについて

立命館大学　障害学生支援室
酒井　春奈

2024.12.10

立命館大学について

主に学生がいる４つのキャンパス

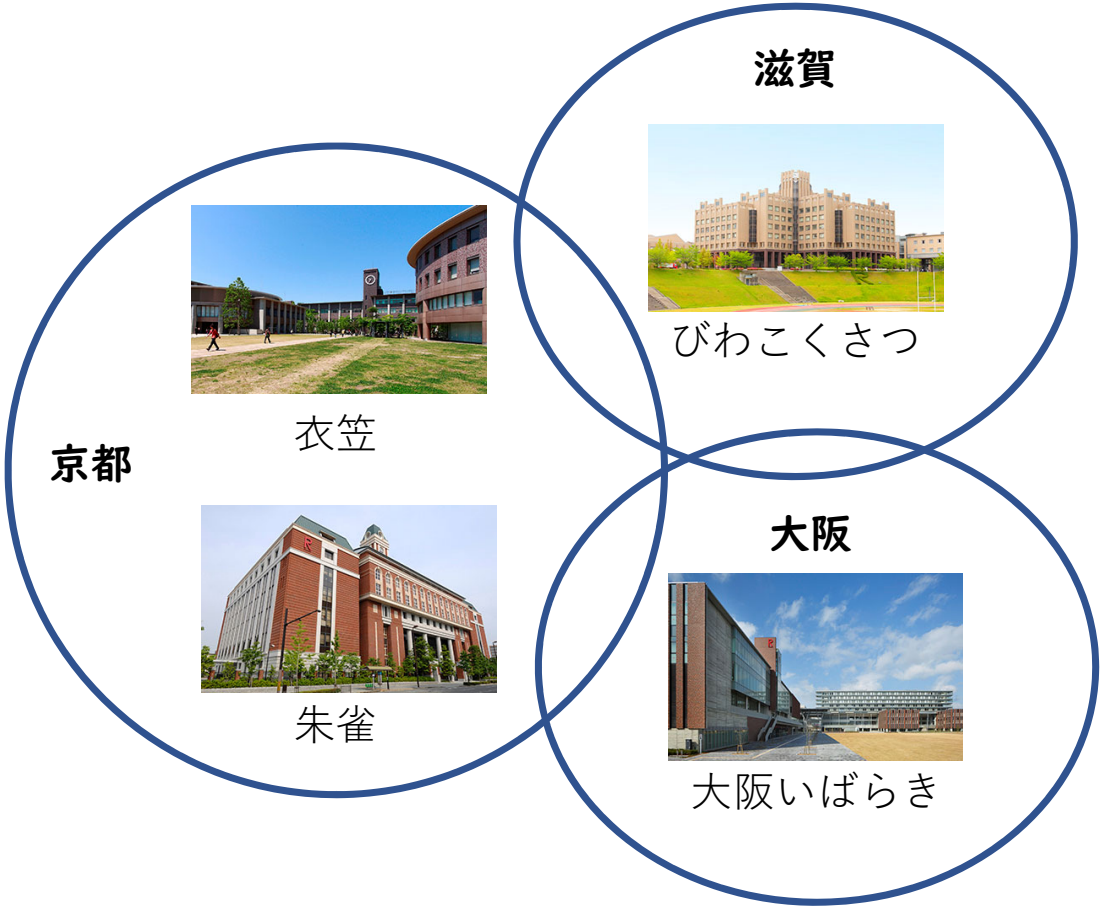
学生数約3万5000人

キャンパスごとの立地（環境）や
想定される災害が異なる

➡本学の場合は、

地震・火災・風水害を想定した
防災マニュアルを作成している

立命館大学　防災ガイド
https://www.ritsumei.ac.jp/disaster/manual/



障害学生との災害時対応
立命館大学の取組み

◆立命館大学着任（2018年～）時に、大阪北部地震や西日本集中豪雨、台風など大きな災害に見舞われたこともあり、前任校（熊本学園大学）で取組んでいた、避難時に支援が必要な学生を対象とした「障害学生の個別避難計画の作成」を立命館大学でも実施。

◆2018年度7月にFD研修を企画・地域連携課（防災担当）と共催で実施。同年10月に個別避難計画作成のためのワークショップを初めて開催。年度末に「障害学生等の災害時対応ハンドブック」を作成し周知・啓発を行う。

◆以降2021年度※を除き、方法等を工夫しながら対象学生（避難の際に支援が必要な学生）がいるキャンパスにて毎年度災害時対応を実施している。

※新型コロナウィルス感染症の影響で学生の入構が制限されたため、
2021年度は実施なし。

立命館大学障害学生支援室ＨＰにて
閲覧可（テキスト版あり）：
http://www.ritsumei.ac.jp/drc/

障害学生との災害時対応
立命館大学での取組み

◆2020年度に「中長期の災害時対応を考える
サイコロジカル・ファーストエイド（PFA)研修会」を実施。

◆2022年度に公益財団法人CTC未来財団の助成を受けて、イーバックチェアを各学生オフィスに設置。導入時に職員（学生オフィス・地域連携課(防災担当））を対象に講習会を実施。翌年も、各学生オフィスにて講習会を開催。

◆2023年度はイーバックチェアの講習会に加えて、12月にFD企画として、竹田先生を講師としてお招きして障害学生支援室主催の「障害のある人と災害時対応」の講演会を実施

障害学生との災害時対応に取り組み始めた経緯

◆2011年の東日本大震災以降、災害時対応の必要性を意識。
前任校で、障害学生と災害時対応について検討を始める。

◆2014年、2015年に「しょうがい者と災害を考える」ワークショップを減災ソーシャルワークの担当教員に依頼、実施。

◆2016年4月　熊本地震を経験 → 授業再開後も余震が多く続く

◆同年～、全体の避難計画の見直し…「車いすの学生は一律、大学が準備した介助用車いすに乗り換えて避難」の文言に課題を感じ、減災ソーシャルワーク授業担当教員の助言をもとに、避難時に支援が必要となる障害学生（主に肢体不自由）と「個別避難計画書の作成」に取り組みを始める

※2014年度～2018年の活動については熊本学園大学（以下）HPより参照できます
https://www.kumagaku.ac.jp/gakusei/shien/shogai/report

個別避難計画とは何か

「障害が多様なように避難において必要となる支援も様々です。また何より、障害学生自身が主体的に、災害時にどのような避難をすべきか他の人へ明確かつ具体的に伝えられるようにしておくことが重要です。つまり、障害学生自身が自分の障害について理解し、適切な配慮を伝えられることが求められます。これを実現する手段を「個別避難計画」といいます。」

（立命館大学障害学生等の災害時対応ハンドブックｐ4より）

2013年6月の災害対策基本法の一部改正で、
防災施策において特に配慮を要する高齢者、障害者、乳幼児等を
「要配慮者」とし、また「要配慮者」のうち、
災害発生時の避難等に特に支援を要する方を（避難行動要支援者）としており、
2021年5月の災害対策基本法の改正では、
避難行動要支援者ごとに「個別避難計画」の作成を市町村の努力義務とした。

障害学生の個別避難計画書
作成の目的とねらい

◆障害の多様性を知る

同じ電動車いす利用でも、脳性マヒの学生、骨形成不全の学生、頚椎損傷の学生など、避難時に支援する方法が異なる。例えば、骨形成不全の学生をおんぶして避難することは骨折のリスクを高める。（全盲、弱視の学生も同様）

◆障害学生自身が、避難方法について理解する

自らの身体がどのような状況（具体的な障害状況）なのか。車いすの場合、車いすのどこを持つべきか、安全に運べるかどうか。全盲の学生の場合、誘導の仕方などを確認する。

◆障害学生が主体的に発信する

個別避難計画の作成を通して、自身の必要な支援が何であり、どういった支援があれば良いか発信する。発信する経験を通して、日常においても、支援を活用する力につながる（つなげるきっかけにする）。

個別避難計画書作成のための
ワークショップの内容

項　目	内　容
①事前研修 （1時間程度）	個別避難計画書作成の目的や、計画書の作成方法を学ぶ。また小グループ（障害学生1名に対し複数名の支援者）をつくり、障害学生からは、災害時に必要な対応を聞き取り、避難方法を立案。シミュレーションに備える。
②シミュレーション （1時間～90分程度）	障害学生がよく利用する建物で、立案した内容をもとにシミュレーションを行う。その場で、より安全な方法なども確認。さらに階段の勾配や幅なども確認し、安全に避難できるかどうか確認をする。
③個別避難計画書の作成 （1時間～90分程度）	シミュレーションした内容をふりかえり、再度、小グループで話し合い、障害学生が主体となって計画書を作成する。

①事前研修（アセスメント）

障害学生自身が避難時に課題に思っていることや、持っている資源（車いすの情報など）を発信、聞き取り、整理していく。
※聴き取りの際にアセスメントシートなど活用

・SOSは出せますか？
・自分のことを人に説明できますか？
・次の場合は、どうすれば皆が安全な避難ができますか？
　地震（慌てず避難）の場合/
　火災（急いで避難）の場合
・どんな支援機器が使えそうですか？

➡整理した上で、
避難方法を2つ程度立案する。

アセスメントは必要？

Aさん（簡易電動車いす利用）のケース

- サポートスタッフとの避難訓練時に車いすの持ち手を確認。
- Aさんの指示通りに車いすを持ち上げようとしたら、フットレスト（足のせ）の部品がはずれ、バランスを崩しそうになる。

➡オーダー車いすのため、部品が外せてコンパクトになる、車に載せやすいつくりになっていた。

➡Aさんは普段、車に乗る際も家族が車に車いすを載せており、日常生活において車いすごと運んでもらう経験がなく、どういった車いすの構造か理解していなかった。

事前研修・アセスメントの意義

障害学生は意外と

- 「自身の障害についてよくわかっていない」、
- 「車いすなど日常使う支援機器のことも十分に知らない」、
- 「周りの状況がどうなっているのか見えていない」

…ということがある。

シミュレーションから始めないのは、「安全面の確認をしておくため」でもあるが、まずは、「障害学生が自身の障害や日常の支援機器（車いすなど）について理解する」こと、そして「災害時に周りがどのような状況になるのか」を知り共有することも目的としてある。

支援機器の確認をする

◆アセスメントで立案した、避難時に必要な機器をシミュレーションで試してみる。

担架？　自走用車いす？　昇降機？

そのほか必要になる支援機器とは何か？

◆また避難後、一時避難場所への移動をどうするのか、機器をどう管理するのかも考えておくことが必要。

介助用車いす

担架（ベルカ）

昇降機（イーバックチェア）

②シミュレーション

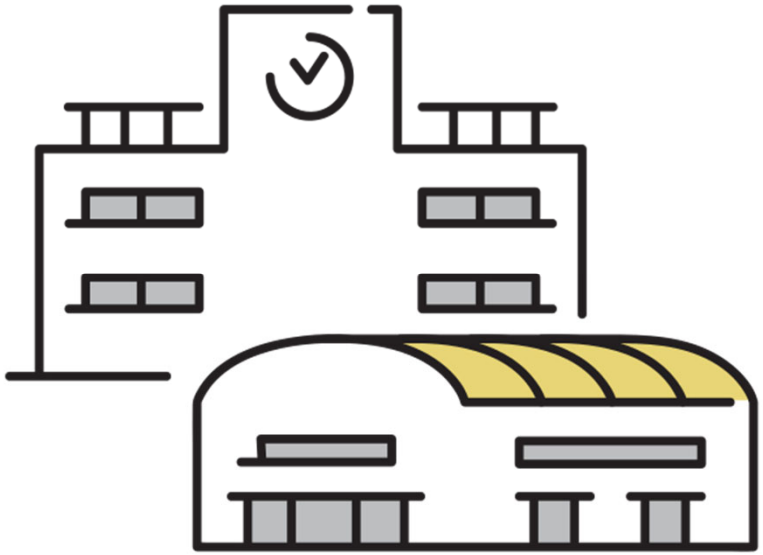
◆計画を立てる障害学生が日常よく利用する建物でまたシミュレーションを行う。

◆可能であれば、立案した方法すべてをアセスメントの際に関わっていない、他の参加者でも対応できるか検証を行う。

※障害学生が支援者を集めることができるか

※集まった支援者にわかりやすく避難方法を伝えられるか。

※時間を計り、火災の際に早く安全に逃げられる方法も検討する



②シミュレーション

計画：救い帯で避難

体験：揺れがひどく気分が悪くなる

体験後：簡易電動車いすを（バッテリー外して）抱えて避難する

シミュレーションを通して、障害学生・周囲（支援者）がより良い方法を探る

③個別避難計画書の作成

- シミュレーションした内容を振り返り、また避難のサポートをした学生からの意見など取り入れながら、障害学生が計画書を作成。※右記フォーマットを活用。発話が難しい学生の場合も、計画書をその場で確認できるよう、簡潔な内容にしている。
- 完成した個別避難計画書は、障害学生本人、学生が所属する学部事務室、防災担当部署、障害学生支援室など、障害学生本人の同意のもとで共有。

災害時対応ハンドブック
P8-9参照

■個別避難計画書（記入例）　作成日：　年　月　日

個別避難計画書

氏名	山田 太郎 ← フルネームを記入。必要に応じてフリガナを入れる。

障害の特徴と留意点

- 両下肢麻痺、体幹機能に障害がある
- 杖で歩行ができ、自力で立ち上がることも可能
- 長距離を歩くこと、走ることが難しいため、普段は電動車いすを利用
- 上記のように、状況を伝える。身体に触れる際に痛みなどがある場合は、留意点として加えて記述する。

車いすについて	いずれかに○	重さ	注意事項
	手動　(電動)	約 30 Kg	手動⇒電動　切り替え可能

災害時の移動について

避難方法※	おんぶで避難 ← 避難方法は複数ある場合、2つに絞って、優先は表に、もう1つの方法は裏面に記述。	
支援に必要な人数	計　2～5　人	
やってもらいたいこと	介助者	2 人
	車いすを運ぶ人	2 人
	バッテリー、荷物運ぶ人	1 人

[避難の手順]　＊本人より指示します。

1. 2名で踊り場で交代しながらおんぶして降りる。
   ＊サポートする人のその場の人数、体力に応じて交代する場や回数をその場で決める。
2. ひとりがおんぶをし、もうひとりが階段や周囲に障害物がないかを確認しながら荷物やバッテリーを運ぶ。

＊支援に必要な人数が2,3人と少ない場合は、先に障害学生を運び、後から車いすを運ぶ。支援者を多く確保できた場合は、役割分担する。

強調しておきたいことは赤字で表示するなど工夫。

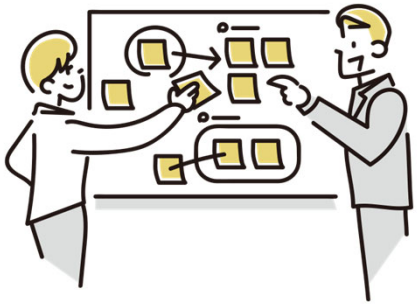
※以下、車いすを運ぶ際の注意点

①車いすが手動モードになっているか確かめる（黄色いバーです）
②車いす後ろ側にある転倒防止バーを引っ込める（両輪の間にあります）
③車いすを持ち上げる(最低2人必要)　抱え込むように持ち上げてください

ワークショップで見える化をする

- ワークショップには、障害学生が所属する学部事務室や地域連携課（防災担当）にも参加してもらい、障害学生の避難の様子を確認してもらっている。
- またこれまでには、職員以外にも、学生サポートスタッフや障害学生の所属するゼミ生、防災サークルの学生にもワークショップに参加してもらうこともあった。

➡障害学生の**主体性**を大事にしつつ、
避難をサポートする**周囲の意見も取り入れる環境**を
つくることを意識して実施している。



（一方で…）災害時対応の難しさ

昨今のユニバーサルデザイン・バリアフリーが進む環境下で
自身に障害があるという意識が離れていき、
自身が必要とする支援を意思表示する力や、
交渉する力を身につける機会が少なくなる（中野 2012）

災害時はバリアがある環境に否応なしに引き戻される

e.g.　日常はエレベーターを使用できるため困り感がない
非常時はエレベーターが使用できなくなる　→バリアが生じる

災害時対応は非常時に直面する「障害（バリア）」に、
あえて事前に向き合うことになる。
その「しんどさ」を丁寧にフォローする必要がある。

後回しになってしまう…
障害学生に対する災害時対応

災害時対応の必要性は理解しているが…

- 日々の修学支援など、日常業務が優先されてしまう。
- 他の業務と兼務など、支援担当者の人員配置の課題。
- 大学の規模、障害学生の数（多い、少ない、避難時に支援が必要な学生がいないなど）によって、意識に差がでる。
- 災害時に備えておく支援機器にかかる費用、維持や管理を誰がするか、そもそも何を準備すればいいかわからない。
- 日常業務で防災担当の部署との関わりがない。

個別避難計画作成の前に…まずできること

◆個別避難計画書のワークショップは障害学生の同意のもとに実施する

避難行動要支援者に該当する学生がいない、学生の参加の同意が得られない

→「できないから、やらない」でいいのか。

◆（今後）自治体での避難行動要支援者の個別避難計画の作成※が広がれば、障害学生は大学で避難計画を作成しなくてもいい？

◆個別避難計画＝災害時対応ではない。あくまでツールの一つ。

では大学や支援担当者は何をすべきか？？

※2021年5月の災害対策基本法の改正では、避難行動要支援者ごとに「個別避難計画」の作成を市町村の努力義務とするとともに、作成に必要な個人情報の利用及び個別避難計画の活用に関する平常時と災害発生時における避難支援等関係者への情報提供について、個人情報保護条例等との関係を整理の上、規定を新設

災害等の緊急時対応に関する
スタンダードの活用

◆2019年に策定。本編23ページ、参考資料11ページ。
◆2020年にショートバージョン（右図）を作成し、
全国の高等教育機関（1,179校）に配布
◆セルフチェックが可能
◆1＋3つのステージ
✔事前の情報収集
1.　災害発生前
2.　発生時・直後
3.　発生後・中長期的避難生活・通常生活への復旧および回復
◆三者の視点
・大学組織
・障害学生支援担当部署
・障害学生

←QIショートバージョンは
こちらのQRから
確認できます

東京大学「障害と高等教育に関する
プラットフォーム」
PHED：https://phed.jp/

QIショートバージョン

【東京大学 PHED SIG-EP】

災害等の緊急時対応に関するスタンダード

障害に関する災害等緊急時対応スタンダードの位置付け

はじめに

今回は、東大PHED、SIG-EP災害等の緊急時対応検討グループが作成した「災害時において困難に陥り得る障害者に対する災害等における緊急時対応にスタンダード（高等教育機関用）」（Quality Indicator）を皆様へお届けします。4つのフェーズ ①事前の情報収集 ②災害発生時 ③災害発生時・直後72時 ④避難生活から復旧・回復へ、における障害者の対応に特化したスタンダードを作成しました。今回は、Quality Indicatorのショートバージョン（項目の抜粋）およびチェックリストを作成しましたのでご活用いただけますと幸甚です。なお、随時にコンサルテーションも行っておりますので、さらに詳細に対応策をご検討いただける観点からのご連絡もお待ちしております。
そうした準備を行っておくことは、障害者にとっても有用であると思われますので、各観点におかれましては、貴大学の状況に応じて進めていただくことを切に願っております。

スタンダードの使い方

障害者を中心とした災害等の緊急時対応についてスタンダード（Quality Indicator）は、一般的な大学組織、障害学生を（あるいは障害のある学生集団を含めて）想定していますが、加えて、障害者以外の災害時要配慮者／避難行動要支援者（以下、要支援者）についても活用できることを念頭に作成しています。また作成の上で、4つのフェーズと3つの行動観点を想定しています。

このQIの対象
一般的な組織の大学、障害学生、障害のある学生集団を対象、障害者以外の要支援者

3つの行動観点
①大学や運用部門として、大枠の行動計画や組織整備をするなどシステマティックな対応
②災害発生時に障害のある人の傍にいた際の対応
③障害者自身が何をしておくべきか

4つのフェーズ
緊急時対応を想定した準備・対応のタイムラインに応じて、
・フェーズ0（PHASE0）：事前の情報収集　・フェーズ1（PHASE 1）：災害発生前
・フェーズ2（PHASE2）：災害発生時・直後　・フェーズ3（PHASE 3）：避難生活から復旧・回復へ　です。

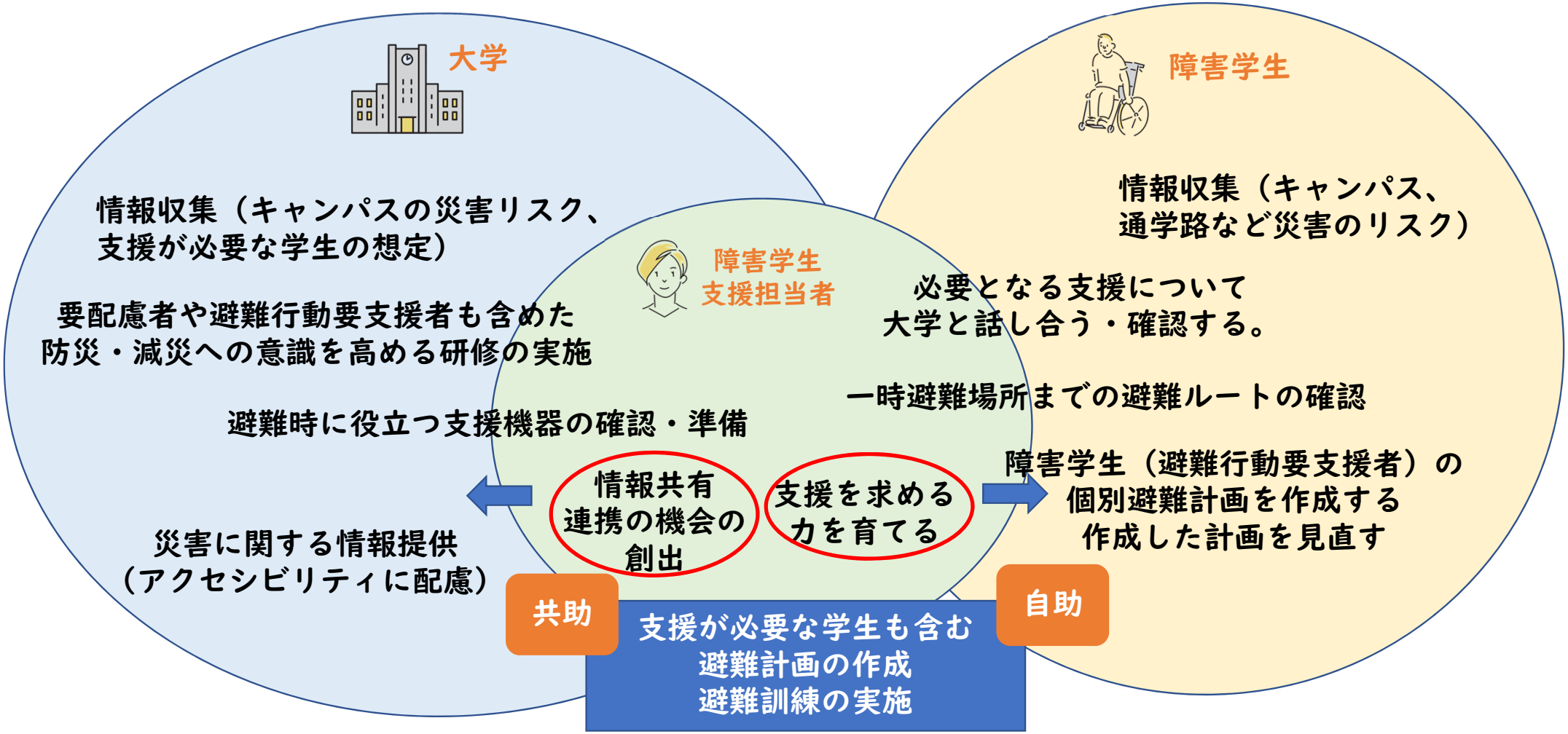
	共通	教職員	大学全体	障害学生本人
[PHASE0] 事前の情報収集	p2	-	-	-
[PHASE1] 災害発生前	-	p3	p4	p5
[PHASE2] 災害発生時・直後	-	p6	p6	p7
[PHASE3] 避難生活から復旧・回復へ	-	p8	p9	p10

重要　最も重要な注意点をお伝えします。ここでお示しするスタンダードは「ある、ない」、または「やっている・やっていない」など2値で考えてはいけないものです。全ての項目において何が重要視されるべきものであって、実際に障害者の災害時対応として「どの程度有効性があるかで準備されているのか」を念頭に置くようにしてください。
災害時対応の検討ですが、頭に入っていることだけでは不十分であり、実際に行動できるように準備をしておく、実現可能性を絶えず育くんでおくことが重要です。

[項目の意図] 次頁からのスタンダード（ショートバージョン）を見ていただく中で、各項目がどのような意図でなぜ重要なのか、またフルバージョンで作業の意図を参照することができます。フルバージョンはQRコードからご参照ください。
[使用にあたって] 前述のように、スタンダードはフェーズにおいて、大学全体、障害学生支援担当者・担当部署、障害学生本人それぞれの立場からどのように行動すべきかをまとめています。障害学生支援担当者・担当部署だけでなく、大学の執行部や災害時担当部署、また障害学生とも共有し、是非ご活用ください。

1

インクルーシブな災害時対応



ご清聴ありがとうございました

以下、ご参考まで。
WEBサイト：
・東京大学　障害と高等教育に関するプラットフォーム形成事業（PHED）
　障害学生支援スタンダード「災害時の緊急時対応」 https://phed.jp/sig/ep/
・立命館大学　防災ガイド　https://www.ritsumei.ac.jp/disaster/manual/
・災害時障害者のためのサイト（NHK）https://www.nhk.or.jp/bousai/shougaisha/index.html

文献：
・中邑賢龍・福島智　編者（2012）「バリアフリー・コンフリクト　争われる身体と共生のゆくえ」
・上野谷加代子　監修（2014）「災害ソーシャルワーク入門　被災地の実践知から学ぶ」
・ゆめ風基金事務局（2017）「SOSにこたえたい！-熊本地震障害者救援本部2016～2017年報告冊子」
・立命館大学（2018）「障害学生等の災害時対応ハンドブック」
・酒井春奈（2020）「リハビリテーション第626号『立命館大学における障害学生との災害時避難の取り組み～個別避難計画作成のためのワークショップの実践と課題～』」